

笑顔を守る

上越教育大学附属中学校

一年 本田拓也

私には十四才年の離れた姉がいます。私が小学校三年生の頃に姪が産まれました。しかし、生まれてすぐ心臓に病気があることが分かり、NICUに入るようになりました。そのことを母親から聞かされた時、NICUとはどのような場所なのか気になってしまいました。調べてみると「呼吸をする、心臓を動かす、母乳を飲むといった、普通に生まれた赤ちゃんができることのすべてを医療に委ねなければいけなく、その医療を行い、赤ちゃんたちの命を全力で支えるところ」がNICU（新生児集中治療室）と呼ばれる場所でした。そのことを知った私は、姪は生きられるのだろうか？どんなふう成長していくのだろうか？と不安な気持ちになり出てきました。半年すぎると一回目の心臓の手術をしました。まだ口からミルクを飲むことができず、鼻からミルクをいれて飲んでいました。一ヶ月という長い間手術のため入院をしていたのですが医師や看護師そして家族などの支えがあり無事に手術は終わりました。普通に健康に生まれてくるのがどれだけ幸せなことなのか改めて考えさせられました。現在、姪は3才なのですが大きな手術を合わせて七回もしています。心臓には大人用のペースメーカーを入れて生活しています。今は一番大きな手術を終えて普通の保育園で元気に過ごしています。

運動は多分出来ない体だと思っておりますが、元気に走ったりしています。昔なら助かったのだろうか、こうやって医学がどんどん

進歩して現在では普通に動いて走り回ることができるようになりました。今の医学の素晴らしさを感じました。姪はどんなに辛い手術でも検査でも大暴れせず声を殺して泣き、がまんする姿や手術後、家族もだれもいなく一人でICUで頑張っている姿、普通なら嫌がって泣いたり暴れたりするのに本当に偉いと思います。薬も大人の薬をつぶしてあるだけで苦いの嫌がることなく毎日きちんと飲んでいきます。まだ三才で小さいし、大人でも嫌がる事もよくここまで多くの困難も乗り越えてきたと思います。そんな困難を乗り越えてきた姪の笑顔を見ると、こっちも心から笑顔になります。毎日頑張っている姿に生きるといふ事の大切さを感じます。また医療のすごさも感じます。まだ三才なのでこれから色々な事があると思います。姪ならきつと乗りこえていけると思います。これからやりたい事や姪の夢も出てくる事でしょう。少し制限はあるかもしれないけど、出来る事は私も協力したいと思えます。

私は、テニスをしているのですが、時々練習を見に来てボールを拾ってくれます。姪は私とテニスが出来るといふ話になっています。多分無理なのでしょうが、ダメとは言いません。何か方法があるかもしれないし、それを一緒に考えてあげたいです。姪は一生懸命生きています。姪の笑顔がまわりを笑顔をします。私もですが姪が頑張っている姿で自分も頑張ろうと思えます。そして笑顔を守る為に皆協力をお願いします。姪の笑顔から命の尊さ、生きる事の素晴らしさを日々学んでいます。

私の将来の目標は、医療関係の仕事に就く事です。姪が笑顔でいれるようその担い手になれるよう学んで行きたいと思えます。姪の笑顔を守れるように。

新潟県教育委員会教育長賞

時代を共に生きる

新潟大学教育学部附属新潟中学校

一年 古泉修こいずみなお行ゆき

田園風景が残る僕の住む町には、高齢者が多く暮らす。以前、町内のスーパーで商品を積み上げた台車を運ぶ店員を見た。安全を考えた結果だろうが、売り場通路のど真ん中を歩く姿は、まるで主役。客が道を譲っていたが、高齢者のシルバーカーに台車が接触した。

「すみません。」
謝ったのは客の方だった。申し訳なさそうに小さくなり、とても悲しそうな表情を浮かべた。僕は客が謝った事に強い違和感を覚えた。

近所のスーパーでは、休日でも高齢者が多い。確かにシルバーカーは通路を塞ぎがちだ。加えて高齢者は動作が遅いので、周囲に遠慮する場面が多い。高齢化社会となった日本だが、皆、生きづらさを感じているのだろうか。

若者は、身体も大きく動作も機敏だ。しかし、僕たち若者と高齢者との差を生み出す原因は、体力的な問題以外にも存在する。それは、急速な科学技術の進歩による生活様式の変化だ。コンピュータが活躍する情報社会となった現代。便利な時代と感じるが、オンラインシステムの多さに戸惑う高齢者も多く、それに伴い価値観の違いも生じる。大家族だった昔は家族内にもそれぞれ役割があり、互いに尊重し合い生活していたのだろう。しかし、時代の変化と共に「おばあちゃんの知恵袋」を活かす場面も減っていったに違いない。

今年の夏休み、戦争、及び戦後復興期の様子をテレビで見た僕は、その壮絶な生活に衝撃を受けた。当時を生きた人々の知恵や工夫、強靱な精神力は、若者には計り知れないものだ。日々の生活の中では、か弱い存在に見える高齢者も、内面に秘めているものは強く大きいと知った。いざという時には、長い人生経験に基づき知識を、僕たちに授けてくれるに違いない。もちろん、高齢者が若者の手を必要とする場合も多いだろう。それでも、彼らは人生の大先輩であり、常に尊敬の念を抱き接すべき人たちであると改めて痛感した。

現代社会の波に乗って今を生きる人々は、どこか自分たちの方が優位に立つ気がするかもしれない。しかし、若者は若者の世界、高齢者は高齢者の世界で生きているわけではない。高齢期は、年を重ねれば誰もが迎える人生のステージであり、今、同じ時代を共に生きているということを決して忘れてはならない。世代のギャップが生じたとしても、各世代の持ち味を理解し受け入れた上で、互いに助け合い補い合っていくことが必要だ。核家族化が進んだ今は、地域が家族の役割を担うことが理想だ。そのためには地域交流を活発にし、心を通い合わせることが重要である。

僕が所属する新潟天文研究会では、観望会や写真展等を地元で行っている。毎年、九〇歳を過ぎた方も何人か訪れる。声をかけると、

「できるだけ外に出て、色々なものを見たい。」
と、嬉しそうに言い、会話も弾んだ。ひと声がかきつけで心も通じ、顔見知りになれる。活動範囲が狭くなる高齢世代は、地域が大切な社会の場となる。同じ体験を通じ、時間を共にする事が理解し合える一番の方法だ。異世代が少しでも近づき、絆が深まったらいい。

先日、スーパーでのこと。天文研究会の観望会に行った高齢者と、星の話に花が咲いたと、顔見知りの店員が教えてくれた。この店では、星空観望会のポスターを店内に貼付してくれている。

少しでも住民が触れ合うきっかけを作るため、今後も僕は、僕の個性を活かした地域活動を積極的に行う。「この町が好き」と言う高齢者が増えることを目指して。

新潟日報社長賞

ちがいだけなぜ見るの？

上越市立高田西小学校

五年 内田心桜

わたしには、しずちゃんという友達があります。しずちゃんと私はお母さん達が友達で、産まれた時からの友達です。でもそんな私の友達しずちゃんは話すことができません。これを障害を持っていると気づいたのは、私が小学校に入学する時でした。こんなに近くに住んでいるのに、しずちゃんは別の学校へ行くことになったからです。でも、私はしずちゃんが障害を持っていても、持っていない関係ありません。大好きな友達です。しかし、去年とても悲しい事件がありました。「人も障害を持つ人が亡くなった事件です。犯人は「障害者は不幸を生むだけ。いなくなればいい」と言っていました。このニュースを見て「亡くなったのが障害者でよかった」と言う人もいたそうです。でも、そんなことを言うのはまちがっています。確かに、しずちゃんもまわりの助けが必要です。私は、しずちゃんの笑顔が大好きです。笑ってくれるとうれしい気持ちになります。私にも得意なことや苦手なことがあるように障害を持っている人もそれぞれが個性で、みんな何もかわらない大切な命だと思います。それに、私達もいつ障害を持つことになるかわかりません。病気や事故で今できることができなくなるかもしれません。だから、障害を持っていて人を差別することは、未来の自分を自分で苦しめることだと思います。きつと障害を持たない人達は、障害を持つ人と関わる機会が少なくて理解することが出来ないのだと思います。私もしずちゃんとちがう学校に行ったので関わることは減りました。みんながもつ

大切な目印

長岡市立青葉台小学校

五年 江口 江口 江口 江口 江口
江口 江口 江口 江口 江口

と関わる機会があつたら、みんな一人一人がちがうこと、ちがつてどうせんとゆうことに気づくと思えます。とつてももつたいいです。私には、たくさんの友達ができました。障害を持つている友達も持つていない友達もみんなが大切です。みんながかけがえのないそんざいだと伝えたいです。この作文を書きたいと思つたのもそのためです。みんながちがいをみとめあつて自分らしく生きていけるような社会を作りたいです。けれど、まだ子供の私にできることは、少ないです。しかしちがいがあつてよいことを伝えることはできます。大人でも障害を持つて人を「不幸を生んでる」などと言う人がいる中で、今の時代に産まれてきた子供である私達は、これからのことをよく知り正しい考えを持つて生きていきたいです。

「骨折だからギプスに松葉づえだな。」

病院の先生の言葉に、足の痛さより、そんなの目立つしはずかしいと私は泣いてしまいました。お父さんやお母さんは、すぐに良くなるし助けるから大丈夫だよと言つてくれたのに、私はその言葉も悔しくて、大丈夫！と強く答えてしまいました。

でも、家に帰つて玄関前のたつた八段の階段を一人で上がれず、お父さんにおんぶをしてもらいました。恥ずかしいという私に、お父さんは、ギプスと松葉づえという目印があるのだから恥ずかしがらなくて大丈夫と言いました。目印？と聞く私に、

「人は困つている人がいれば助けるのは当たり前、でも、困つている人に気づくことはとても難しい。ケガをしているという目印のある私は助けてもらつていいんだよ。」
と言つてくれました。

学校へは、お母さんに助けてもらい早めに登校しました。玄関の戸を開けるのも松葉づえでは開けられず、靴を脱ぐにもいすがなければ出来ません。三階の教室に行くのだから松葉づえとランドセルを持つてもらい、手すりにつかまつて片足跳びであがりました。

教室では、友達に助けてほしいと言つて嫌な顔をされたらどうしようど不安でしたが、私が言うよりも先に、助けるよ！と言つてくれました。目印のおかげだ！と不安が小さくなりうれしかったです。授業でも、友達が教科書を持つてゆつくり歩いてくれて、

思いやりの一歩は、心の持ち方

長岡市立青葉台小学校

五年 宮下 月希

給食の配ぜんもしてくれました。昼休みはいつも通り、一緒に黒板に絵を描いて遊びました。友達が助けてくれることはうれしかったし、いつも通りにしてくれたこともうれしかったです。家では、私に出来ることはないか考え、家族の洗たく物をたたもう！と決めました。不自由でも自分でやりたいという気持ちもあるんだなと少し不思議でしたが、私にも出来ることがあるという自信にもなりました。

ギプスと松葉づえがなくなり、二本足で立てたときは本当にうれしかったです。当たり前のことが出来るこの気持ちを忘れてはいけないと思いました。ケガをしたことは悲しかったけど、気づいたこともたくさんありました。周りの人が助けてくれる優しさ、不自由でも自分でやりたいと思う悔しさ、自分の気持ちを相手に伝える難しさです。

私は人に話すとき、なんて声をかけよう、嫌われたらどうしよう：と色々考えてしまいます。もし、困っている人がいても、恥ずかしくてすぐに声をかけられないかもしれないかもしれません。でも、経験した私にしか分からない気持ちや私だから出来ることもあると思います。

まずは、私に出来ることはないか、困っている目印がないかを探して助けてください。

そして、いつか目印がなくても気づける大人になりたいです。

「自分で動けなくなった人でも、手を貸してあげれば、起き上がれる。寝たきりでなくても起き上がるようにしてあげれば、体の調子が良くなる人もいるんだよ。」

私の母のお友達に、下半身が動けなくなり、自分での身動きが取れない人がいる。その人は一人で生活していて、手助けしてくれる人がそばにいない。たまに、介護してくれる方が来て身の回りの世話をしたりしているが、基本は一人。自分でやれる事の制限がある。

私の母は、そんな友人の家の家へ、たまに私を連れて行くことがある。その人を介護する時に、抱きかかえながら、体を起こしてあげようと、体を支えてあげる母を見た時、すぐ力のいるものではないか？と私は思った。母はいつも、その人のお世話をし、帰りの車の中で、必ず運転しながら、口に出しては言わないけれど、腰がとても痛そうにおさえて、痛みをがまんする顔をする。私が、

「お母さん、腰をいためたの？」

と聞くと、首を横にふり大丈夫と言いながら、

「うまく出来て助けてあげているようで、抱きかかえることも、いろんな事をしてあげること、私のような、しろうとでも本当はやるからには、知識や技術が必要なんだよ。」

と教えてくれ、

「力をかけず出来る知識さえわかれば、今は力任せに起こしてし

まって私も力がいるし、つかれるけど、起こされる方も痛いと思う事が多いはず。でも知識があれば、楽に出来るし、たがいに助かるよね？」

と言いながら、母は、もつと上手に、手助け出来なかったことを反省している。

私は、なぜ母が私をその人の所へ連れていくのか、はじめはわからなかった。友達とは言え、ここまでしてあげるのかと思う母の姿を見て、理解出来ない気持ちだった。ところがある時、友人の人が、

「ありがとう。こんなことまでしてもらって情けないよ。でも心から感謝しているよ。」

と、母へ涙を流しながら、お礼を言っていた。

その姿を見た時に、動けなくなってしまった体は、自分が好きでなかったわけではないこと。ケガをしてそんな体になってしまったのだから、くやしいに決まっている。元気に動きたいの出来ない苦しさで、一番つらい思いをしているのだと言うことが、私はわかった。その時、初めて、母が私をなぜいつも連れて来るのか何となくわかった気がした。

お世話する時は、一人の人間として、尊重してあげることが大切で、お世話をしてあげる気持ちでなく、同じ立場の人間だけ、たまたま体が動かないから、お手伝いをすると考えることが大切だとわかった。

そう思えた時から、私も出来る介護をするようになった。母は、いつもこんな気持ちで接していたと気づいた。介護をする時の心の持ち方を変えた時、自分のやった行動がとても心の中をそう快にした。

新潟県共同募金会長賞

共生していくために

上越市立城東中学校

二年

山本 七海

私は七月に五日間、保育園で職場体験学習を行いました。たくさん子どもたちがいる中で、障害のある園児ともふれ合いました。その子たちは、ほとんど言葉が話せません。また、先生が園児全員に指示を出しても、一回で理解することが難しく、先生がいつも手をひいてあげなければいけません。先生方も大変だけれど、小さい頃から障害を抱えているその子たち自身が一番辛いだろうなと私は思っていました。

自由時間で、みんながそれぞれ遊んでいる中、障害のある女の子が、一人でおもちゃをさわったり、口に入れたりしていました。私はその子に話しかけ、おもちゃを渡してみました。すると嬉しそうに笑って、他の子と同じように遊びだしました。そしてその子が、おもちゃの果物をお皿に並べて持ってきてくれました。また、名前を呼ぶと私の方を向いて反応してくれました。ちゃんと分かってくれているのだと思い、とても嬉しくなりました。こんなささいなことでも私は嬉しくなって、その子と「もつと仲良くになりたい」「もつと笑顔になってほしい」と思いました。それから私は、障害のある子と積極的に関わりました。面倒を見るのは、他の子と比べて少し難しいし大変だけれど、それ以上にやりがいを感じました。

また、障害のある女の子。朝の集まりでその子が進行役の当番の日。仕事を忘れて座っていると、周りの子たちが、

「今日お当番だよ。」

と優しく声をかけてくれました。そして全園児で発表する踊りの練習の後には、別の障害のある男の子の頭を、近くで練習していた女の子がなでている場面もありました。きつとその女の子は、ほとんど踊れない中一緒にあって手をたたいたり、回ったりしていた男の子に、「頑張ったね。」と伝えたかったんだろうなと思いました。私は、見ていてとても感心しました。みんな平等に優しくできる園児たちを見て、世界中がこんな風に思いやりのある人であふれればいいなと思いました。

これから歳を重ねるにつれて、周りの子たちとの差も大きくなってしまふけれど、「障害があるから」ということから差別を受けることなく、たくさんの人と一緒に、みんなと同じように強く生きていってほしいとその時感じました。

世界には、障害のある人や、介護の必要なお年寄りの人が、たくさんいます。その人たちと一緒に、支え合って生きていくために、体の不自由な人の気持ちになって、もっと行動に移していきたいです。そして、そんな気持ちを持つ人が、一人でも増えていけばいいなと願っています。

私はいつも健康で過ごさせているのが当たり前だと思っていました。体が不自由なところがあり、ずっと苦しい思いをしている人がたくさんいるという事に改めて気付きました。心も体も苦しい中頑張って生きている人たちを、さらに傷つけるようなことは、絶対にはいけません。私たちは、今自分にできることを探し、全ての人と共生していくことが大切です。

体にどんな障害がある人も、ない人も、みんな一人の人間ということは変わらないから、一人一人がどんな人とも支え合っている、明るい社会をこれからつくっていききたいです。

